

# 「迷宮」を探す旅

旅に出ると、「迷宮」を探す癖がある。

それはたとえば、路地が複雑に入り組んだ古い町並みであったり、内部が迷路になっている忍者屋敷のような建物であったり、ときにはそういった生身で入って行けるものすらなく、彫刻や壁面に描かれた架空の世界であったりする。とにかく現実であれ空想であれ、その場所で意識をさまざまに浸るのが好きだ。

なので、ベトナムでホンノンボと呼ばれる盆栽に出会ったときは興奮した。

ホンノンボは、ベトナムの伝統的な盆栽である。水を張った鉢に岩を置き、それを島に見立てて植物やミニチュアを配して、ひとつの景色を作る。

ミニチュアは主に、楼閣や釣り人、囲碁に興じる老人などで、ときには孫悟空なども登場する。いずれにしても植物が主体ではなく、桃源世界を写すことが目的なので、箱庭と呼ぶほうがふさわしいかもしれない。

私はそれを、ハノイのホテルで見つけた。テラスに出たら、そこにさりげなく置いてあったのだ。ミニチュアが載った岩は、遊び心に溢れ、それだけにはじめは従業員が適当に作ったオブジェか

## 宮田 珠己

プロフィール  
1964年兵庫県生まれ。主に旅をテーマにエッセイを執筆。  
著書は『ふしぎ盆栽ホンノンボ』（講談社文庫）、『たいたい四国八十八ヶ所』（集英社文庫）、『四次元温泉日記』（ちくま文庫）、『晴れた日は巨大仏を見に』（東南アジア四次元日記）（ともに幻冬舎文庫）、『おかしなジバング図版帖 モンク・ヌスが描いた驚異の王国』（パイ・インターナショナル）など。

思った。しかし、以来あちこちで見かけたため、不思議に思いつて調べてみれば、伝統的な盆栽だったわけである。

ホンノンボは私にとつて紛れもない「迷宮」であった。

自分が小さくなったつもりで、その世界の中を散策する。するとまるで山水画に紛れ込んだかのような心地がして、穏やかな気分になった。

「迷宮」はつまり、現実逃避のための道具なのである。旅に出ているのに、なぜさらなる現実逃避が必要なのか、という私の個人的問題はさておき、どんな文化にも何らかの現実逃避の道具が用意されていると私は考える。それは一般には宗教の役割なのかもしれないけれど、宗教とまではいなくても、もつと卑近な「迷宮」が、人の心を日常的に癒しているのではないかと仮定するとき、遊園地から、リカちゃんハウスに至るまで、世界中に「迷宮」が溢れている現実には深く頷ける。

ホンノンボのような、いまだ知られざる伝統的「迷宮」が、世界にはもつとあるのではないか。

そう思うと、「迷宮」を探す癖は、これからは治ることはなさそうである。

## 月刊 みんなぱく

5月号目次

- 1 エッセイ 千字文  
「迷宮」を探す旅  
宮田 珠己

### 特集 モノから生まれたものがたり

- 2 アムール川の岩面画と三つの太陽のものがたり  
佐々木 史郎
- 3 小説に生まれ変わるモノ  
対談 いいしんじ × 山中 由里子
- 6 渋谷の三つのモノ語り  
飯倉 義之
- 8 ピラミッドにまつわる物語  
亀谷 学
- 10 ○○してみました世界のフィールド  
初航海のふがいなさ  
須藤 健一
- 12 みんなぱく Information

- 14 味の根っこ  
クスクス（後編）  
二村 淳子

- 16 文化遺産おもてうら  
台湾原住民族の工芸品に付された名前  
——創る主体と所有の主体  
野林 厚志

- 18 音の居場所  
ソリ（音）に思いを込めて  
高 正子

- 20 人間学のキーワード  
ホワイト・ネイション  
前川 真裕子

- 21 次号予告・編集後記